女役割再考

黒　木　雅　子

政治的、宗教的、男性中心的独断主義にいまだに支配されている余りにも多くの国で、男性と女性は鋳型にはめこまれて硬化している。おそらくそうあることで苦痛と不安から免れているのだろうが、それは同時に、一人の人間のあらゆる可能性を開化させるという、人間の最も美しい冒険を失っていることでもある。(最後の植民地　ブノワット グルー)

1　女役割とは

人間は社会生活を送るなかで複数の顔をもっている。それはその人が占める社会的な位置によって異なる役割である。たとえば女性の場合、女、娘、妻、学生、労働者、母、主婦などがあるが、主婦役割は女役割の中心となる。つまり主婦役割（家庭内の役割）が第一でその他の役割は女性にとって二義的と見られる。主婦は妻、母親、女という地位と役割を含んだものであるが、これはたんに主婦だけでなく、主婦でない女性にも主婦になることが望ましい姿とされる。

少し前までは、働く既婚女性に「なぜ働くの」？という社会的なまなざしがむけられた。しかし、現在は、子育ての一段落ついた女性が家にいると、反対に「なぜ働かないの」？と聞かれるという。たしかに一部でこのような役割期待の変化はみられるし、また既婚女性の就業が女役割からの逸脱という見方も少なくなってきた。それでは「女は家庭に」という性別役割分業観およびステレオタイプな女らしさが変化したのであろうか。そのような変化には、制度的改革はもちろんのこと、男女の役割を二分化している社会規範、さらにそれを

内面化している個人の意識変容までみる必要がある。本稿では女性の行動にみられる変化と同時に意識の変容がおこっているかを見るなかで、現在、日本で女性に期待されている役割の再検討を試みたい。いうまでもなく、筆者が言う性役割の変化とは、後者をも巻き込んだもので、それがアメリカの1960年代におこった第2期の女性解放運動[1)]で言われた意識改革（consciousnees raising）である。

2　女役割の相対性

女性が生産労働に従事していた時代から、職住の分離によって家族の役割が消費単位へと変化したのは産業革命以後、近代にはいってからである。アン・オークレー（1986）は、17世紀におけるイギリスの女性の役割をつぎのように主張する。「結婚によって役割に生じる相異も、今日ほど大きくはない。結婚に当たっては、男ばかりでなく女も、生産労働—農業なり、織物なり、一定の商売を—続けていくことが期待された。従って、女が結婚相手の男に経済的に依存するという考えはなかった」。そして、この頃は妻子が勝手に食べていくという考えが普通であり、既婚女性が自分の生計を立てるよう期待されるのは、上流階級で17世紀ころ、また労働者階級では18、19世紀までであった。

主婦を英語で housewife というが、アメリカの女性のなかには自分たちを主婦（housewife）とよぶことを拒否している人もいる。そしてこれにかわる言葉としてもっと広い意味で家族や家事の責任を表す homemaker（男性にもつかえるセクシストでない言葉）を使う。また、domestic manager や household technician, household manager という言葉も使われている（André 1981）。しかし女性たちのなかには homemaker とよぶことさえ限界があると考えるもの

1)　ほとんどの歴史家はアメリカにおける女性解放運動を2つにわける。18世紀の終わりから1920年（参政権獲得）までと、1960年以降から現在までである。ただしこれを3つにわけ、南北戦争から1890年まで、そのあとから1920年まで、そして現在とするもの（Duberman）もいる。

もいる。オークレーは主婦をホームメーカーと呼ぶことは「葬儀屋が葬儀師と名乗りだしたようなもの」であり、何の役にもたたなかったという（オークレー、1986)。何と名前をつけようと、家事労働に対する社会的評価や、主婦役割が女役割のなかで占める比重は変わっていない。

日本で専業主婦が出てきたのはきわめて新しく、この言葉がでてきたのが明治の中頃以降だろうといわれている（生活科学調査会 1969)。いまでは働く女性の方が新しい女と見なされがちであるが、少数の上流階級は別として、家事に専念するいわゆる専業主婦は、サラリーマン家庭の登場によって現れてきたものである。さらに大正に入って、従来の婦人雑誌の読者層とは異なり、普通のサラリーマン家庭の主婦を対象に、「主婦の友」（大正6年)、「婦人倶楽部」（大正9年）が発行されるようになった。このような主婦雑誌は読者層の拡大という点では貢献したが、「女は家庭を守るもの」という社会通念を固定化し、良妻賢母主義を補完する役割を果した。しかもこれらの主婦雑誌がつくり出した「主婦像家庭観が今も装いを変えて生きつづけている」という意味でその功罪は見過せない（駒野、1975)。さらに、戦後民法が改正され、夫婦中心の核家族の増加によって、性による役割分担が定着し、新しい主婦の時代が到来したのである。したがって、それまで多くの女性たちは、農業、商業、家内生産業などで家事のほかに生産労働に従事しており、現在女性に期待されている「家にいて、家事、育児に専念し、夫や子供の身のまわりの世話をするだけ」という主婦の理想像はなかった。

女性の役割の中身は歴史によって変わるだけでなく、社会や文化によって異なる。これについて、マーガレット・ミードをはじめ多くの文化人類学の研究が社会によって異なる性役割の存在を報告をしている。もちろんどの社会でも、女性の出産、授乳という機能は女性だけの生理的な役割であるがオークレー（1986）は「自然によって（言い換えれば、生物学的に）定まっているのは、性役割の違いではなく、生殖の違いである」という。

以上述べたように性別分業が社会によって、また時代によって異なるにもか

かわらず、それが不変であるという主張が神話である。つまり現在の日本で女性に期待される役割は、様々な社会で見られる多様な女性の生き方の一つにすぎないということである。

3　性役割の社会化

男と女ではからだの構造や機能が異なる。しかし、また生まれた時から男女の育てられ方が異なるのも事実である。フェミニズムは、「男女が異なる社会的役割をもち、異なるパーソナリティをもつよう生物学的に運命づけられており、それが自然である」とする考え方を問題とし、性役割の形成における社会化の重要性を強調する。

社会化とは人がその社会の行動規範やルールなどを内面化するプロセスである。まず生まれてから着せられるうぶ着の色にはじり、おもちゃ、絵本などによって、男子には積極的で自立的、女子には受動的で依存的であることが期待され、男女は異なったしつけを両親からうける。このような社会化の担い手は両親だけでなく、仲間、教師、学校、マスメディアなどがあり、これらによってその性にふさわしいとされる役割が伝達、強化される。この社会化は幼年時に完結するものではなく、人の生涯を通じて行われる発達のプロセスでもあるが、だいたい男と女が、その性によってふさわしいとされる行動を身につけるのは4才位までといわれている（Parson, 1978）。

日本、アメリカ、フィリピン、イギリス、西ドイツ、スウェーデンの6ケ国で男の子と女の子のしつけを比較調査した結果が表1である。これによると日本では「男の子は男の子らしく、女の子は女の子らしくしつけたほうがよい」とする割合が最も多く、反対に「差別なくしつける」とする割合は最も少ないことがわかる（総理府婦人問題担当室、1984）。女性は好んで家事をやり、主婦業を選んでいるということがよく言われる。しかしその前に「女の居場所は家庭である」というメッセージが、いかに幼いうちから送られ、強化され続けてきたかを考慮しなければならないであろう。

表1　子供のしつけ方　(%)

国	該当数(人)	男の子は男の子らしく，女の子は女の子らしく，しつけた方が良い	差別なく，同じようにしつけた方が良い	その他	わからない
日本	1,294	62.6	34.4	0.4	2.6
フリィピン	1,200	28.1	67.4	0.3	4.2
アメリカ	1,200	31.3	61.9	5.3	1.5
スウェーデン	1,220	6.0	92.0	1.1	0.8
西ドイツ	1,333	19.9	74.5	1.7	3.9
イギリス	1,224	20.1	76.3	1.9	1.7

「婦人の生活と意識」—国際比較調査結果報告書

4　女性の役割は変わったか

女子労働力率の上昇、平均寿命の延びと産児数の減少、家族の変化、家事の省力化、教育レベルの向上、法制面での改革と女性をとりまく社会的な環境は大きく変わってきた。たとえば、今では女性雇用労働者は働く労働者の3人に1人、また働く女性の7割近くは既婚者である。ただし、1981年の総務庁の調査では、女子雇用者のうち、パート、アルバイト、その他を含む非正規従業員が26.1%で男子（5.9%）と比べると、女性の不安定就労がわかる（日本婦人団体連合会、1985)。また女子雇用者の増大だけでは女性の地位向上や伝統的な性別役割分担の変化は計れない。女性の職業分布と収入の面も見る必要があるからである。たとえば1983年における雇用者に占める女性の割合を職業別に見ると事務職、保安職業、サーヴィス職、専門的、技術的職業が約半数を占め、管理的職業はたった5.7%である。しかもこの専門的、技術的職業の中身を見てみると、女性の専門職のほとんどが伝統的に女性の職業といわれるものである。医療保健技術者（助産婦、保健婦、栄養士、看護婦など)、教員でも幼稚園、小学校と初等教育ほど女性が多いというパターンは変わらず、女性の占める職業に偏りがあることがわかる（将来構想研究会、1979)。この傾向は日本だけ

でなくアメリカにおいても顕著にみられ、比較的賃金の低い、たとえば小学校の教師、看護婦、事務職などのピンク、カラーとよばれる仕事に集中している。

また男女賃金格差を見ると、1977年日本では女性の賃金は男性の約半分(58%)、アメリカでは61% (1974)、もっとも高いオーストラリアでは93% (1976) である (将来構想研究会、1979)。これらのデーターを見ると、日本で働く女性が増えたといっても、女性の地位の向上がすすんでいるとはいいがたい。また共働き夫婦の増加は、イデオロギーの変化というよりも、経済的な必要性からくる場合が多く、共働きをしないですむならそのほうがよいと考える人も少なくない。

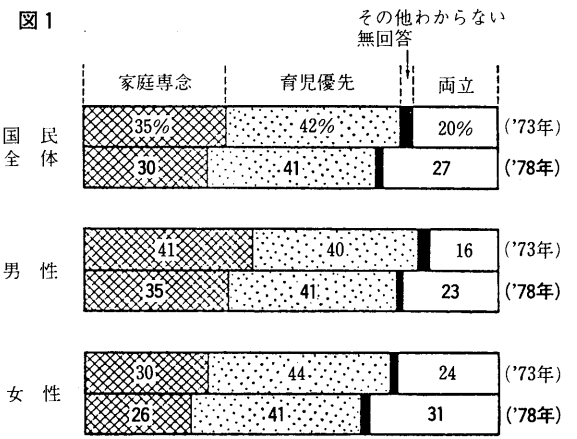
津田塾大学、明治学院大学、東京教育大学、東京薬科大学、お茶の水女子大学の5校の女子卒業生の調査を見ると、卒業直後のフルタイムの就業は数年のうちに大きく後退し、職業参加は卒業後6—10年目にひとつの転機をむかえていることがわかる。「女性は何よりも子どもの存在—子どもの数、年令にしばられ、第二に夫の存在—夫の収入、仕事、態度によって家庭に足どめされる」(吉田、神田、1975)。また彼女たち大卒女性の意識は一般の女性よりも家庭中心主義の傾向が強いという。大学卒業と同時に結婚して家庭に入る人は少なくなったとはいうものの、家庭と職業との間に役割葛藤が生じた場合、彼女たちは容易に職業をすてる。このような選択を、自分の主体的な選択としてでなく、女性の役割として家庭に入る女性も多いのではないだろうか。女性の高学歴化がすぐには伝統的な女役割の変化とは言いがたいゆえんである。

日本では「女の幸福は家庭」という考え方が依然として強い。1984年の意識調査によると女性の結婚について、「結婚したほうがよい」(女の幸福は結婚にあるから、精神的、経済的に安定するから、人間である以上当然だから) とする割合は女性で69.8%、男性は75.7%である。女性にとっての結婚を絶対視する割合は年々減少している (総理府、1985) とはいうものの、伝統的な結婚観をもっている人はまだ多数を占めている。これに対して「一人だちできればあえて結婚しなくてよい」と答えた女性は、24.1%、男性は14.7%で、(総理府、

1985）男性の保守性がうかがえる。ちなみに、1975年のアメリカの1522人の女性を対象に行ったある世論調査によると、そのうち2/3は女性にとって結婚をしなくても幸福になれると答えている（Social Issues Resource Series, 1976）。

それでは、夫婦の役割について男女はどのような意識をもっているのであろう。既婚女性と職業について調べたＮＨＫの放送世論調査によると、1973年から1978年にかけて、家庭専念は減り、両立が増えているが、育児優先型が最も多い点は変わらない（図１参照）。これを男女別に見ると、家庭専念と答えた男性は女性より多く、両立と答えた男性は女性より少ない（ＮＨＫ放送世論調査所、1979）。これらのデーターで注目したいのは男女の役割意識にみるギャップである。

図１



結婚した女性と職業（国民全体，男女別）

「現代日本人の意識構造」

さらに1973年から1978年にかけての男性の変化を詳しく見ると、別の様相があらわれる。20代前半の男性で、男子により高い教育を受けさせたいという率（39％から46％へ）、夫唱婦髄型を理想とする率（15％から21％へ）は増え、社会に出たばかりの男子に対する父親のありかたとして「親しい仲間のようにつきあう」が減り、「忠告や助言を与える」が増えた。つまり男子に期待する

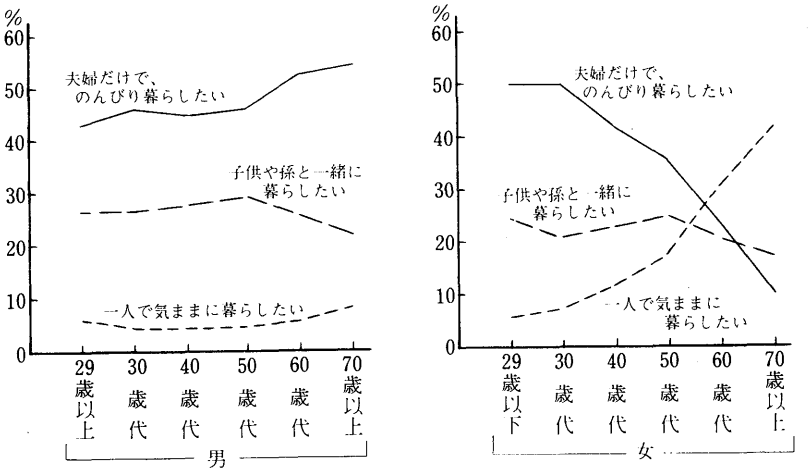
教育程度、夫婦の関係、父親と子供の関係において男性優位と権威を認めようとする傾向が若い男性のなかで強まっている。(ＮＨＫ放送世論調査所、1979)。また1984年3000組の夫婦を対象に行った生命保険文化センターの調査によると「家事は女の仕事」と答えた妻の比率は若い世代ほど低く、反対に夫のほうは若い世代ほど高くなっている。ここでも家事の役割分担における男女の意識のギャップと若い男性の保守性が見られる。(毎日新聞、1985)。これらの調査結果だけで一般化できないにしても、男女平等の方向に向かって変化しているはずの意識は、特に男性の若い層においてそのあゆみを止めているという一つの徴候は注目すべき点である。

男女の意識のギャップは、1986年に兵庫県が行った全所帯アンケートにもはっきり見られる。図２を見ると、老後をどのように過ごしたいかという質問に対して、「夫婦だけでのんびり暮らしたい」という男性は全体に女性より多いことがわかる。男性は各年代で40％を超え、60歳以上では50％以上であるのに対して、女性は40歳代以下で40％台見られるものの40歳から年令があがるにつれて「夫婦だけで暮らしたい」という割合は減っている。また「一人できままに暮らしたい」という女性は60歳台で30.8％、70歳台以上では42.3％となっているのに対して男性は各年代で10％を満たない（兵庫県広報課、1986)。思秋期といわれる時期をむかえるのは中高年の妻だけではないようである。会社人間できた夫たちにとって定年後をどのように過ごすかが問われており、それは女たちがかかえている問題と表裏一体である。

以上の調査で見てきた男女の意識のギャップの深刻化は、妻からの離婚の申し立てが夫からのものより多いという現象と関係があるのではないだろうか[2)]。男女の意識のギャップが女性に何らかの行動に向かわせるという点で、似た現象が日系アメリカ人にも見られる（黒木、1986)。日系アメリカ人といっても世代によって異なるが、男女観や家族観は明治の日本人に近いものが残ってい

2) 1981年の最高裁家庭局の調べでは、夫からの申したてによる離婚は27％、妻からのものは73％である。

図2　〔一緒に暮らしたい相手〕



「昭和61年度県民全世帯アンケート結果報告書」

る。日系アメリカ人における非日系人との結婚（異人種間結婚）のタブーは伝統的な男女観を維持していく上で大きな役割を果たしていた。明治生まれの1世にはほとんど見られなかった異人種間結婚は世代が新しくなるにつれて増えているが、とくに女性に多く見られる。これは日系人の家族に残る男性優位と女性に対する隷属的な役割期待が女性の不満となって異人種間結婚へと向かわせる（Tinker, 1973）という。

伝統的な女性の行動パターンにはあまり見られなかった、このような女性の離婚や結婚は女性の意識の変化のあらわれと解釈できるかもしれない。しかしむしろ彼女たちがこうした行動や意識に向かわざるえない原因、つまり伝統的な役割観がとくに男性に顕著に見られることに注意を払いたい。伝統的な性役割に対する女たちの異議申したて、男女の意識のずれからくる葛藤など、声や行動に出しはじめた訴えの内実は、人間らしく生きるとはどういうことなのかという根源的な問いが、女だけでなく男にも投げかけられていると捕える必

要がある。ライフサイクルの変化、寿命の延び、子供の数、家事の省力化などによって、女性が主婦、母、妻という家庭内だけの役割で一生が送れる時代は変わりつつある。それにもかかわらず、女性に期待される役割は基本的には変わっていないようである。

5　性別役割分担をこえて

文化や時代によって見られる性役割の多様性は、性役割の存在を生物学的要因だけで説明することを困難にする。今の日本で男性と女性に期待されている役割は、さまざまな社会に見られる（られた）役割モデルの一つにすぎない。

近年、女性の雇用や教育における変化は著しいが、すでに見てきたように、性役割観に全面的な変化が起こっているとは言いがたい。社会的変化に対応する新しい役割モデルが必要であるにもかかわらず、「女の居場所は家庭」という旧来の役割観は男性だけでなく女性自身にも根強く残っている。たとえば1983年博報堂生活総合研究所がおこなった不安の調査は、調査対象者のなかで戦前の教育を受けたものが少数派になっているにもかかわらず、「旧来の良妻賢母という女への役割期待が化石のように固くこびりついている」と指摘する（博報堂生活総合研究所、1984）。それは意識というより、頭ではわかっているが心情的に割りきれない情念の部分であり、新しい役割と古い役割の間で女性の葛藤や不安を引きおこすことになる。

こうした矛盾は主婦の不満や孤独、またアルコール依存症、育児ノイローゼ、中高年女性の空巣症候群、という形をとることがある。しかしこのようなマイナス面を強調し、現象だけを眺めていても問題の背景にある社会構造が見えなくなる。このような現象を、伝統的な女役割そして性別役割分担を支える生産優位社会に対する警告として捕らえる必要があるのではないだろうか。したがって、それは女性だけの問題ではなく、つきつめれば男と女のありかたが問われなければならない。女性の役割の再編成は男性の役割の再編成にもなるからである。

アメリカでは窒息しそうな伝統的性役割によって、男性も自由な生き方が阻まれそのひずみは受けているということから、男性研究がすすんでいる。Men's Studies Task Group の Sam Femiano によると、今日アメリカではウーメンズ スタディーズに触発されてメンズ スタディーズのコースが100ほど教えられている（Men's Studies Newsletter February 1986）という。その数は女性研究におよばないまでも、男性の役割への関心がでてきたことは当然とはいえ望ましい傾向である。たとえば、20世紀のアメリカにおける男女の寿命の差は、男らしさを強調する男子の社会化と関連があるのではないかと指摘する研究（Harrison, 1978）もある。女性だけでなく、男性も支払っている代価の大きさに気づく時期が来ているのではないだろうか。

男らしさの神話への固執は心理的、身体的にひずみをもたらすだけでなく、望ましい男と女の関係をつくることも困難にする。それでは伝統的な性役割を問いなおすというとどういうことなのか。ステレオタイプな女らしさや男らしさが問題だというと、それでは女が男なみになったり、男が中性化すればいいのかというような、白か黒かの二分法のわなにはまりやすい。第三の選択が考えつかないのである。やさしさと強さは男と女のどちらか一方だけに備わった資質ではない。男女を問わず、自立し、成熟した（mature）個人なら時と場合によって発揮できる資質である。私たちにとって今すぐ手本となるような実験ずみの第三のモデルはない。またフェミニズムが浸透していると言われるアメリカやヨーロッパの一部の国にそれを求めても、参考になるだけで、かわりのモデルはみつからない。アメリカでは男性と対等に仕事をしているキャリァーウーマンが、家庭では伝統的な妻と夫の役割にとらわれている場合も少なくない。単なる男女の役割を逆転するだけでは新たな問題を生むことになる。

男女の平等は、パートナーとの関係、または家事・育児の分担が基本的なものさしとなる。というのは、教育や雇用における平等・法制面の改革などと比べて、より個人の変革（personal change）という重要なプロセスを必要とするからである。家庭の内と外、両方で男女双方にとって抑圧とならない新しい役

割モデルが必要ではないだろうか。

引用文献

André, R., *Homemakers: The Forgotten Workers*. The University of Chicago Press, Chicago 1981.
Duberman, L., *Gender and Sex in Society*, Praeger Publishers, N.Y., 1975.
Groult, B. (有吉佐和子/カトリーヌ. カドゥ訳)『最後の植民地』新潮社 1979.
博報堂生活総合研究所『不安—女の時代と影』1984.
Harrison, J., Warning: The Male Sex Role May Be Dangerous to Your Health. *Journal of Social Issues*. Volume 34, No. 1, 1978.
兵庫県広報課『昭和61年度兵庫県全所帯アンケート結果報告書』1986.
駒野陽子「新家庭論」田中寿美子編『女性解放の思想と行動』戦前編 時事通信社 1975.
黒木雅子「日米の文化比較からみる日系アメリカ人の性役割」『女性学年報』7号 1986.
毎日新聞「《家事は女の仕事》—若い夫ほど高率に」1985年5月24日.
The Men's Studies Task Group of the Nationsl Orgnization for Changing Men. *Men's Studies Newsletter* Volume 3, No. 2 February 1986.
NHK放送世論調査所編『現代日本人の意識構造』日本放送出版協会 1979.
日本婦人団体連合会編『婦人白書、1985』ほるぷ出版 1985.
Oalkley, A., (岡島茅花訳)『主婦の誕生』三省堂 1986.
Parsons, E. J., Classic Theories of Sex-Role Socialization. In Frieze, H. I., Parsons, E. J., Johson, B. P., Ruble, N. D., and Zellman, L. G., (eds.), *Woman and Sex Roles*, W. W. Norton and Company, N. Y., 1978.
生活科学調査会編『主婦とは何か—家事労働と婦人の意識』ドメス出版 1969.
将来構想研究会編『図説 女の現在と未来』亜紀書房 1979.
総理府編『婦人の現状と施策』ぎょうせい 1985.
総理府婦人問題担当室監修『婦人の生活と意識—国際比較調査結果報告書』ぎょうせい 1984.
Tinker, J. N., Intermarriage and Ethnic Boundaries: The Japanese American Case. *Journal of Social Issues*, 29(3), 1973.
Where Women Are Heading. *Social Issues Resources Series* Volume 1, Article 53, 1976.
吉田昇、神田道子編『現代女性の意識と生活』日本放送出版協会 1975.

参考文献

金森トシエ/北村節子『専業主婦の消える日—男女共生の時代』有斐閣 1986.
国際女性学会編『現代日本の主婦』日本放送出版協会 1980.
目黒依子『女役割—性支配の分析』垣内出版 1980.
Money, J. and P. Tucker, (朝山新一/朝山春江. 耿吉訳)『性の署名』人文書院 1979.
Myrdal, A. and Klein, V. (大和チドリ/桑原洋子訳)『女性の二つの役割—家庭と仕事』ミネルヴァ書房 1985.

Oalkley, A.,（佐藤和枝．渡辺潤訳）『家事の社会学』松籟社 1980.
女性社会学研究会『女性社会学をめざして』垣内出版 1981.

Summary

Reexamining Women's Roles

Masako Kuroki

In Japan, we have been seeing many social changes influence women's lives. In spite of these changes in education, law, family and employment, traditional women's roles which prescribe their place as at home still remain strong. Even though more and more women enter the paid labor force, they often have to give up their jobs when they have children. Women who may work outside their home, or have to work for solely financial reasons are expected to do so without disturbing their roles at home as wife and mother. Their social roles outside their homes are secondary. Role reversal is not the answer to these problems. Nor will extension of social roles for women as workers outside their homes be effective without changes in basic male-female sex roles. We need to restructure the frame of reference for sex roles which divide men's from women's sphere.

We may sometimes see women who pursue a career also play the traditional women's roles at home. Not only women's roles in the workplace, but also her roles at home need to be changed. Unlike other social changes, it may be more difficult to bring about change at home because it requires the personal changes of both men and women. Equality of men and women should be measured by the relation with a partner and by the sharing of housework.

Now there are psychological problems which some housewives are facing: neurosis, alcoholism, or the empty-nest syndrome, for example. These problems can not only be attributed to their personal weakness, but to the continued emphasis on traditional sex roles and the production-oriented society which enforces them. We have to realize what we, both men and women, pay for sustaining traditional sex roles and the need for restructuring them.